

岩田真美・桐原健真編
『カミとホトケの幕末維新』
—交錯する宗教世界—

法蔵館，2018年11月刊，A5判，383頁，2000円

明治150年を機に刊行された、幕末維新期の宗教をテーマとする論文集である。当該期は日本の宗教史においても大きな変動の時代であり、現代社会にも少なからぬ影響を与えている。近年、近世史・近代史の双方で研究の進展が顕著であり、通説的な理解の見直しが進んでいる。本論集はかかる研究動向を牽引する研究者によるものである。

構成は3部で、下記のように、12本の論文と、最新の研究成果や萌芽的な論点を紹介する13本のコラムが収録される（敬称略、コラムには*を付した）。

はじめに（桐原健真）、*明治百年と一九六八年の宗教界（大澤広嗣）

第Ⅰ部 維新とカミとホトケの語り：神仏分離研究の視角をめぐって（上野大輔）、*孔子の変貌—儒学と明治日本（桐原健真）—、日本宗教史学における廃仏毀釈の位相（オリオン・クラウタウ）、*廃仏毀釈と文化財（碧海寿広）、「世直し」の再考察—宗教史的観点から—（三浦隆司）、*宗門檀那請合之掟（朴澤直秀）、「民衆宗教」は誰を語るのか—「民衆宗教」概念の形成と変容—（青野誠）、*維新は迎えられずとも—烏伝神道の断絶と「民衆」—（青野誠）

第Ⅱ部 新たな視座からみた「維新」：幕末護法論と儒学ネットワーク—真宗僧月性を中心に—（岩田真美）、*勤王・護法の実践—真言宗の勤王僧—（高橋秀慧）、排耶と攘夷—幕末宗教思想における後期水戸学の位相—（桐原健真）、*京坂「切支丹」一件（松金直美）、維新前後の日蓮宗にみる国家と法華経—小川泰堂を中心に—（ジャクリーヌ・ストーン）、*仏教教導職の教化活動（芹口真結子）、明治維新にみる伊勢神宮—空間的変貌の過程—（ジョン・グリーン）、*幕末京都の政治都市化と寺院（高橋秀慧）

第Ⅲ部 カミとホトケにおける「維新」の射程：幕末維新期のキリスト教という「困難」（星野靖二）、*幕末維新のキリスト教伝道（落合建仁）、幕末／明治前期の仏書出版（引野亨輔）、*絶対的創造神への批判—釈雲照のキリスト教観①—（船田淳一）、仏教天文学を学ぶ人のために—佐田介石と幻の京都「梵曆学校」が意味するもの—（谷川穰）、*天主とは何者か—釈雲照のキリスト教観②—（船田淳一）、社寺領上知令の影響—「境内」の明治維新—（林淳）、*明治は遠くなりにけり—明治仏教史編纂所のこと—（大谷栄一）

対象は仏教・神道・儒学・キリスト教・民衆宗教の動向など多様である。ここでは、一つひとつの論文・コラムについて詳しく紹介する余裕はないので、編集の意図を汲みつつ、本書の特色を概観することにした。

まず、第Ⅰ部では、学術的な叙述の再検討がテーマになっている。「神仏分離」「廃仏毀釈」「世直し」「民衆宗教」を取り上げ、同時代における政策や信仰の実態と、現在用いられる学術用語・概念との差異を丁寧に明らかにし、それらがいかなる背景のなかで用いられ、定着してきたのかを論じる。そして、このような用語・概念が、これまで宗教に関わる人々の当事者意識のなかで、あるいはさまざまな時代背景や学術的な問題関心のなかで扱われてきたことに注意を喚起する。

第Ⅱ部では、近代への見通しのなかで論じられてきた問題を、近世の実態を踏まえて再検討する論考が配されている。たとえば、岩田論文は排仏論への対応として理解されてきた護法論は、実は幕末期に儒学者との同志的ネットワークを背景に形成されたことを明らかにする。その上で、それが近代にかけてどのように変容し、その後の認識や「語り」にも影響するのを示す。桐原論文の水戸学における「攘夷」が観念的なものに変容するとの指摘、ストーン論文の小川泰堂の思想と実践、グリーン論文の伊勢神宮と宇治・山田・古市の社会も同様で、近世段階の分析を踏まえて再検討を加えることで、明治期における変容もより明瞭になっている。

第Ⅲ部では、維新後の状況が、宗教の近代化の一般的な説明とは異なる切り口で描かれる。たとえば、星野論文は、当該期のキリスト教を「正統」や「近代化」といった枠組みとは違ったかたちで、より当時の実態や認識に即して捉えようとする。引野論文・谷川論文は近代化の進展という文脈には回収できない事例や、西洋文明に抗する動向を取り上げて分析する。林論文は政治・宗教とのかかわりのなかでのアカデミズムの立ち位置を考える上で重要な論点を扱っている。このように、新たにもたらされた知識や考え方を、人々がどのように受け止め、行動したのかさまざまな角度から描かれている。

以上のⅠ～Ⅲ部で意識されている視角は、全体を通してそれぞれの論文でも共有されており、いずれも概念や用語に再検討を加えつつ、近世・近代を連続的に分析し、変容を明らかにするものとなっている。現在の幕末維新期の思想・宗教史研究を知るための好著である。（林 晃弘）

『歴史学研究』2019年2月号（980号）お詫びと訂正

英文表紙 著者名

TERAMOTO Keiko → (正) TERAMOTO Noriko